

幼稚園の定員を考える

立川多恵子

幼稚園の学級定数について考えるためには、学級そのものについて、十分な理解がなければならぬ。今まで私自身、一人ひとりの園児については異常なほど興味を持ちながら、「学級」については余り関心がなかった。そこで、学級定数について論じる前に、「学級」そのものの意味を考え、その上で改めて、学級定数の問題に触れて行きたい。

一、学級の誕生

数年前、私は郷土の幼児教育の歴史を調べるため、明治から昭和の初期に創設されたいくつかの幼稚園を訪ねたことがある。

私の住んでいる町にも、大正四年に、アメリカ人宣教師アプタン女史の手によって、初めての幼稚園が開園された。当

時を知っている人の話では、某家の別荘を借り受け、その周辺の家庭を訪問し、十二名の幼児（三歳から六歳）を集め、二十坪足らずの家に、砂場だけを作って開園したという。

子どもたちは毎日お弁当を持って登園し、一番大きい部屋に集まっては、保母さんから話を聞き、歌をうたい、庭先に出ては、鬼ごっこ、砂あそびに興じた。

最初十二名だった園児数も、先生方の努力が実を結んで、数年後には、四十名を越えるようになった。そこで女史は、二つのクラスに分けることにした。

開園当時からいた人に、クラスはどんな基準で分けたのかと聞いてみると、「年齢別」ということであった。

この園では、それ以来、三歳、四歳、五歳と、年齢別学級編成が行なわれ、今日に至っている。現在は園児数一五〇名

余、年長二組、年中二組、年少一組の計五クラスとなり、町の中心部に鉄筋コンクリートの園舎を構えている。

町の周辺には、昭和四十年後半から、五十年に亘って、園児数三〇〇〇〜四〇〇〇余名、一〇学級前後の園が次々に創設された。

後から設立された園は、各保育室は廊下で結ばれ、クラスの独立性が尊重される。この傾向は、私の住んでいる町ばかりでなく、他の町にも見られる。

いろいろの年齢の子どもが入り交って遊んでいたかつての小規模な幼稚園は、幼児教育の重要性が強調され、都市化が進むと、入園希望者の数が急増して、大規模園に変容し、入園児は、年齢別にいくつかの「学級」に分散して指導されるようになった。

幼児教育の普及は、幼稚園に「学級制度」を確立させた。設置基準では、一学級四〇名以下とあるが、時には、それ以上の園児が十六坪の保育室につめこまれ、就学のための準備教育のようなものが行なわれている。

二、学級制度に対する再考

他方、保育内容を一人ひとりの幼児の発達からとらえてい

こうとする研究者や、実践家は、現在の幼稚園教育に対する批判や、反省も厳しく、すみやかに幼児教育本来の姿に戻さなければと主張する。

幼児は、十分にあそびこむことによって、幼児期の発達課題を達成することにつながると考え、時間で区切られる保育は敬遠され、子どもが自発的に活動するための十分な時間が確保されるようになってきた。時間に対する配慮は、同時に「空間の広がり」に対する配慮を生んだ。このことは、幼稚園における「学級制度」の再考の一つといえよう。

A 幼稚園は、創立十年を迎えようとしている、定員一三〇名の幼稚園である。創設当時は、小学校入学の前段階として、小学校へ行くための準備教育に力を入れていた。そこで展開される保育は、教師が次の日の活動を考え、教材を準備し、教師のねらいに即して指示を与えて、保育者が中心になって活動させるといったものだった。

園長自身が大学の幼児教育研究会に熱心に通うことによって自分の園の保育に疑問を持つようになると、今までなんの不思議もなかった子どもたちの「センス……シテイイ」といふ保育者の指示を求めることばが不自然に聞こえ始め、

幼稚園では、もともとずっと自発的に活動させることが大切ではないかと考えるようになった。

園長の考え方が変わり、先生方がそれに協力した結果、子どもたちは、自分たちの活動に積極的に取り組むようになった。子どもたちは、以前より喜んで幼稚園に来るようになった。そこで園長は、もともと幼稚園生活を子どもたちのものにしてやりたいと考えた。

そのためには、子どもの自由感を十分に保証してやろう。環境を整備して、何時でも、どこでも、子ども自身の興味と関心に基づいた活動が展開できるようにしようと、園長は、先生方に「学級」というわくを取り去ることを提案した。

この園長の提案は、実施するまでに、いろいろな障害があった。もともと大きかったのは、母親たちの反対であった。

「もし幼稚園に学級がなくなったら、子どもたちは、まず自分のやりたいことしかやらないのではないか、それでは活動にかたよりが出てくる。しつても行き届かないだろう」園長は、母親のこうした心配に対して「短期間の中で考えると、たしかに子どもの活動はかたよるように思われるかもしれない。しかし長い目でみたら問題は無い」とか「外側からみて同じように見える活動でも、そこで育つ子どもの内

面はちがっている」等力説した。園長の主張に同調する先生方の熱意も重なって、父母側は、とにかく園に任せようということになった。

新年度を迎えて、園長と六人の先生方は、大はりきりで子どもを迎えた。年長になった子どもたちは、自分の保育室が一定してないのでとまどった。不安な日がつづいたが、やがて子どもは仲間を求めて、さまざまな場所で自分たちのあそびを展開するようになった。新入園児が、自らの力で遊び出すには、多少時間がかかった。

園長も、先生方も、やがて以前より、もともとずっと、ダイナミックな活動が展開されるにちがいないことを期待した。

しかし、その結果、二つの困った出来事に遭遇した。その一つは、保育者が情緒不安になったことである。かつてA園では、一人の先生が、三〇人前後の子どもを担当していた。それぞれの先生は、学級担任として、この子たちについて見守ってやればよかった。

学級がなくなると、登園した子どもは、かばんを置いて、シールをはると、幼稚園中に散る。保育者は、不特定多数の子どもとかかわらなければならない。子どもの気持を察してやることが出来にくい。

そこで先生方は、放課後頻繁に、ミーティングの機会を持たなければならぬと考えたが、それは時間的にも労力的にも容易なことではなかった。

もう一つの困難点は、環境設定の問題であり、環境整備を十分におきたいと、積木コーナー、絵本コーナー等、子どもの活動を予想して、さまざまなコーナーを作ったが、それでも、子どもの活動に対応しきれなくなった。積木も、絵本も、ブロックも幼稚園中に散らかった。子どもは、コーナーに用意されていた遊具を予期しない場所で、予期しない方法で使った。園中に散った遊具をどう整理してよいか悩んだ。

三、学級の復活

先生方は考えこんでしまった。話し合いをつづけた末、もう一度「担任制度」を復活することにした。これを「学級」の復活といっていいかどうかは、「学級」をどう考えるかによって異なるかもしれない。

とにかく、一人の先生と、子どもたちのために、特定の部屋が再び用意された。子どもたちは、その部屋にかばんや、帽子をおき、シールをはると、どこへいってもよいことにな

っていたが、大部分の子どもは、自分の部屋の周辺であそぶことが多かった。

元気な年中児が、年長児の部屋に行くこともあるが、けんかになると、自分の部屋に戻って来る。担任の先生は、それを笑顔で迎える。一度「学級」のワクをはずしたA園も、こうしたプロセスを経て、再び「学級」をよみがえらせた。

「学級」によって固定的になっている空間を広げようとした園長の思いが、先生方を動かしたにもかかわらず、結果的には、保育者がついていけなくなった。

園児数百名を越える園では、「学級」のわくをはずすことは難しい。したがって、幼稚園にとって「学級という制度」は、小学校の模倣的要素も強いが、園長や、保育者の妥協の産物かもしれない。

「学級」も、担任の運営の仕方によっては、たしかに子どもの自発活動を阻害する要因になる。しかし、「学級」を集団生活のホームベース（母港）と考えた場合異なった興味をもつ。担任と子どもが、信頼関係で結ばれ、子どもが不安に感じた時には、何時でも戻ってきて、ホットする場所として学級が存在するなら、「学級」もまた子どもにとって、大事な場所である。

四、保育者側から学級定数を考える

今回は、学級を子どもたちのホームベースと考え、その守り手としての保育者が担当する子ども数を検討することによって、「学級定数」という与えられた課題に答えたいと思う。

私は教え子に「あなたの担当する子ども何人位が理想ですか」と尋ねてみた。

ある人は即座に、「三十五人位かしら、私のクラスは、今、四十三人でしょう、もう少し減ってくれと、行き届くのですけど」また、ある人は「私のクラスは三十三人、二十七、八名に減ってくれと、一人ひとりの子どもが、今日どんな状態だったかわかるのですけど」また、ある人は「私のクラスは、今、二十七人、二十人位になると助かります。この前おたふく風邪で、欠席が多かった週は、一人ひとりの子どもの状態がとつてもよくわかりました」という。

教え子たちのいうことをきいていると、皆、現在の担当児数に満足せず、より少数を望んでいる。一人ひとりと十分つながりを持ちたいとする保育者の願いとしては、当然のことと思える。

一人の保育者の担当可能な園児数は、経験年数で決まるの

か、それとも個人差なのだろうか。

経験一年目の保育者「私は現在、三十四人の子どもを担当しています。最初は二十人位がやっとだと思っていました。

しかし二学期の終り頃から、子どもがグループであそぶようになり、いくつかのかたまりとして、とらえることができるようになると、どうやら全員が見えるようになりました」と。

経験三年目の保育者「私は、子どもがグループであそんでいても、一人ひとりとしてとらえます。例えば、同じように基地ごっこをしていても、それぞれの子どもの思いは、ちがっていると思うのです。私は三十五人を担当していますが、多いと思います」と話した。

経験七年目の保育者「私は三十七人を担当しています。多いといえば、多いような気もしますが、私の場合、多いなら多いで、それなりのやり方をします。……」と話してくれた。私は瞬間さすがベテランだと思ったが、話し合っているうちに、保育の在り方の問題であることに気づいた。学級を一つのかたまりと考え、同じ行動をさせようとする場合、はみ出す子どもについて注意していればよいのであり、一人ひとりのつながりについては気にならないかもしれない。

それに対して、保育者として、一人ひとりと出会い、子ど

ものの内面を理解しながらきめこまかな指導をするには、担当園児数は少ないにこしたことはない。

五、子ども側から学級定数を考える

「学級」は子どもにとって、ホームベースであるとするとき、大人との程度の接触が必要かによって異なってくる。幼い子どもは、何時も大人を慕い、大人との接触を求めるが、成長するにしたがって、幼稚園のどこかに信頼する大人がいることで満足する。そこで不安を感じた時だけ助けを求める。したがって、子どもの年齢によっても、個人差によっても、大人に対する接触度は異なってくる。

また、学級を子どもの主な活動の場と考えた時は、年齢による、グループの大きさと、グループの数などによって、学級定数を推定することも可能かもしれない。

まとめ

幼稚園は、子どもが自発的に活動を展開し、いろいろな遊具や材料に出会い、それと主体的にとり組む中で、イメージを広げたり、子どもなりに思考し、友だちと遊んだり、ぶつかり合う中で、人間関係を学習する場であるとするとき、環境設定として、もっとも大切なのは、自由な時間と、空間とで

ある。その中で、はじめて子どもたちは、自分の可能性の限界にいどむこともできる。

しかし、それだけでは十分ではない。子どもの活動源として情緒安定のためにホームベースに対する配慮も必要である。幼児教育の場で「学級」に、意味を求めるとしたら、子どもが安定して、意欲的に活動できるためのホームベースとしての役割である。学級が、ホームベースとしての機能をもつための必須条件の第一は、担任と子どもが相互に信頼し合っていることである。

こうした見地から、学級定数を考えてみると、現行の基準では、担当児数が多くなり、一対一のふれ合いも十分望めず、良心的な保育者を悩ます。ホームベースとしての意味をもつ「学級」も、学級担任の保育に対する考え方によっては、子どもたちの自由を奪う「わく」的存在となって、子どもの活動を阻害する。担当児数が多いからといって端的に画一的指導をすると、子どもとの一対一の関係が妨げられるばかりでなく、自主性も育たない。園が子どもの自発活動の場を保証するために、思いきって学級のわくを開こうとすることがある。そのためには、園自体の規模についても研究する必要がある。

(十文字学園女子短期大学)